

# 影響された各一冊

aquilex

生きる意味とは、などということをも真面目に考えさせられた記憶は これまでにも幾たびかあった。最初は小学校時分ではなかつたかとおもうのだが、「真面目」という態度がすでに「タブー」であった部類の思想形態属にあった私にとって、生きる意味について語るということの煩わしさや、生きる意味にいかにも正解が存在しそうな胡散臭さであるとか、考えさせられるという外圧的な抑圧感を放棄することで得られる開放感にひたる快感などにより、「生きる意味」などという人間社会進出後に対面することになる「葛藤」の処方箋ともなりえる素のような中核的（現代語訳的にはコア）な問題から自ずから遠ざかってしまっていたのだ。ところが普段の生活の中では払拭していたはずが、生きる意味という言葉の概念を、実は日頃無意識に内的精神に追い求めていたようにおもう。そして、それは単に追い求めていただけで結局生きる意味について自分自身決着がついているわけではないのであり、延々と継続して今日に至る始末なのだ。そんなことにとらわれて何十年も闇雲に暮らしてきてしまった。既におわかりのように自己矛盾に陥り抜け出る術もない状態である（少しばかり喩えが違うのではあるが、芥川龍之介の蜘蛛の糸というお話にもこんな抜け出せないシーンが包括されている）。先程、内的精神と唐突な語彙を出現させたのには、私なりに下手くそな小細工が用意してありまして、それに対抗して社会的因子を用いたい。内的精神はいわば自己そのもとして、自己という不明の意識が発想するもので個人そのものに匹敵する。社会的因子は生活環境としての人間社会のなかでの自分の位置である。理想と現実とにきわめて等しい関係であったことはわたくしが体験している。きれい事ではなく現実である。ここ最近では文学が廃されてきて久しく、また文学らしい文学が輩出している様子もなく、そのもの自体が無意味で必要のないもののように感じさえする。時代背景や生活環境からみても、たしかにどうもミスマッチしている。通勤時間の有効利用、余暇の楽しみとしてならば、趣味娯楽に偏るのは至極自然。情報が氾濫し收拾不能な現代なのである。有り触れた表現ではあるが豊穡な社会に枯渇した精神が蔓延している。文脈が乱れつつあるが、こうした社会不安や疑問、自己精神への懐疑などの苦悩が現在だけのものであるかといえれば決してそうでないのだということをも、たとえばドエフトスキーの「貧しき人々」のなかの主人公の心情などにとってみることができたりする。1846年の作品である。またもや文脈をはずすが、この時代のロシアの文化的な生活様式や形態、常識などといったものが描写されているので、本国と比較してみるといろいろとを感じるものは多い。それで、だいたい悩みをもつということ自体、人間固有のしるもので、例えば進化の過程で動物から人間へと移行するなどの歴史に立ち上るのか。哲学というところアリストテレスの名が浮かぶのだが、その師にプラトンが、先駆にソクラテスが、哲学の祖としてタレスという名がある。いずれも紀元前三百年も五百年も前に活躍した方々なのである。当国は弥生時代か縄文時代かというときなる。とにかく遠くギリシアの地には神の領域から独立して考える道具としての哲学が存在していた。そこで、ひとは何故迷い苦悩するのかということ、選択があるか未解決であるかではないかとおもう。それは自己の中に葛藤が生じていることで決断の材料が乏しく解決に導くことができない状態でもある。自己の中に葛藤があるのは、自己に二面以上のものが存在して可能になる。対立があるからである。ひとつであるはずの自己の多面性は普

通に人間の意識に存在して自然であるし、そういった自己を認識することから本来の自己を追求することができる。マルティン・ブーバー（1878－1965）の「我と汝」は、そういった発想の契機になるややこし本で、丁寧に時間をかけて数式を解く要領がなぜか斬新。現在、コンピュータが普及しインターネット環境もかなり充実して高度な情報もお手軽に入手できる時代になっている。しかも、情報の質も新鮮で無償提供も多いので、長年にわたる有力者筋の知識伝搬率にも変化を生じ、知的階級のこれまでの定義をすこし塗り替えねばならないのではないかといえる。その分低俗な情報もまた勢いを増し、ウィルスの繁殖とか、膨張する宇宙ビックバンを連想してしまう。資本主義経済が正義であるとさえ感じていた自分であったが、これはこれで型は違うが同じ質の不合理感がおしよせてきている。波に乗れていないものの一一致した見解であるはずである。国家の財政困難で膨大な負債を背負い、増税を余儀なくされ、民主的に投票で当選した議員らは増税案に荷担していく方向である。ローマの栄枯衰退のあらましを塩野七生「ローマから日本がみえる」でみてとれる。